楽居

RAKU KYO
TOSIKON FORUM

第三号

2008年春

ウズベキスタン　集落の杏

アトリエから

ウズベキスタンの春　―杏の花咲く村、埴生の宿―

３月中旬から下旬にかけ、かつてシルクロードのオアシス都市として栄えたウズベキスタンを訪れました。大学（昭和女子大学芦川研究室）の調査旅行で、これまでにも研究室の先生方や学生達と十数年、多くの国々の都市や集落を訪れ調査を行っています。

ウズベキスタンの３月は日本の春より少し寒く、早春の気候でした。今や世界遺産に登録された砂漠の中のオアシス都市やキャラバンサライの遺構を訪ねて、さらに砂漠の中を次のオアシス都市へと車で何時間も移動します。砂漠といっても極度に乾燥したステップ砂漠は粗末な放牧地か荒れた耕作地のような場で、集落はこれらの都市と都市の間のステップに出現します。

放牧地に淡いピンクの花を付けた木々が現れると決まって村が真近にあるのです。この構造がウズベキスタンの何処の村にも見られ、樹木は花をつけた杏（あんず）でした。日本の杏と少し異なり花は桜に近く、樹形は梅の姿をしていました。村に近付くに従って多くなりやがて村を取り囲むように茂り咲いていたのです。

住居は日干し煉瓦の土壁と切り妻屋根の簡素な造り。厚い土壁が幾筋にも延ばされ、隣家に繋がって家との間に囲み庭を造り、杏がその中庭に適度な日陰をつくっていました。氷点下－１５度にもなる厳しい冬から春を迎えた村は人も動物もそれらの花の下に戯れ、皆が祝福しているように輝いていました。

なんとも心温まる光景で、何か懐かしく尊い空間を覗き見たかのように思えたのです。杏の花の下の埴生の宿、私達の日本にもこのような時代と風景が在ったはず。私は子供の頃に体験していた遥か昔の、遠い日本の春を思い出して思わず呆然としました。

楽居　編集責任　入之内　瑛

アトリエ住人　―春と言えば―

春と言えば…花<ハナ>咲き揃う春！辛夷（こぶし）・子手毬（こでまり）・水仙・菫（すみれ）・花韮（はなにら）　等。好きな春の花々ですが、私にとってのもう一つの春と言えば…鼻<ハナ>詰まりの春！そう花粉症！！長～いお付き合いです。春の花々を愛でながら、新緑の季節を心待ちにしています。　（松尾 邦子）

春といえば／場所選びと天候が悩ましいサクラの花見／見事に一面黄色に咲き揃うナノハナ／涙や鼻水、結構大変そうな花粉症（自分はまだ大丈夫）／ぶらぶら散策で見つける早春のフキノトウ／うららかな春の陽光と青空に映えるタンポポ／・・・・

（菊池 裕貴）

春と言えば、入園、入学、卒業と子供に関わる行事が思い出されます。我が家は、娘2人、長女保育園入園から末娘の卒業まで22年間、色々有りました。来年からはこの時期が暇になりそうです。この写真は、末娘の高校入学時の学校広報に300名の中から我が子の写真が載せられた物です。この写真が縁で三年間PTAの広報部の手伝いを致しました。仕事づけの私にとっては高校行事に参加でき有意義な三年間でした。　（相原 久恵）

春、ヤクルトスワローズファンの自分が所属している草野球チームが12回目の開幕を迎えました。チーム名は「A70’s」で「エーセブンティーズ」と呼びます。1970年生まれの仲間が中心に集まっているので「almost、about（ほとんど、ほぼ）70年」が名前の由来です。ちなみに今年の開幕戦は勝てました。（スワローズも）　（横山 陽一）

春は気配です。
植物が、動物が、だんだん暖かくなってきて
目覚めていくのと同じように
自分のカラダにも
力が与えられてゆくのを感じます。

（小池 なみ）

春と言えば河津桜かな。私の事務所のある河津は2月中旬から咲く早咲きの桜が有名です。事務所の窓からも樹齢30年ほどの河津桜を望むことができますが、今年の春の嵐で2本とも根こそぎ倒れてしまいました。出張から帰ると残念なことに既に伐採され風景が変わっていました。来年は苗木を植えようかな。　（河津アトリエ　土屋 雅史）

寒さが和らいで、服装も少し軽くなった頃に知り合いの方から頂く“文旦”がいつも春の訪れを知らせてくれます。“文旦”は高知県特産の柑橘系のフルーツで、甘すぎずさっぱりとした味わいです。東京に住み始めてからも春になると実家から“文旦”が届き、その香りと味で春を感じさせてくれます。　（西村 洋平）

春といえば模様替え！カーテンを作ったりクッションを作ったり、その延長でアクセサリーやバッグ、服を作ったり…家で窓全開でミシンをかけていると春だな～と感じます。開けっ放しでいつの間にか寒くなり、春風邪をひくのも毎年の事です。あたたかくなっても夜はまだまだ肌寒いですね…　（成田 未紗子）

作品紹介

～時を繋ぐ建築～
宝珠院客殿、高崎郊外の蔵ギャラリー

建築はその建築主（クライアント）の要望に最も大きく影響を受けて造られますが、設計者の立場からするとそれ以外にも、その場所の自然や気候風土、さらには歴史環境や文化的な側面等も関係して造られます。今日の町並み保存、民家や古い建築物のリニューアルは、ある意味で所有者の要望はさておき、後者の建築の持つ社会性や文化的特性が問われる事が多いのです。

リニューアルの楽しさは、そうした古人の思いや文化的特性を振りかえり再確認しながら、その思いや特徴を新たに所有者に繋げることではないでしょうか。

今回取り上げた二つの建築は、私達がここ２～３年の間に取り組んできた建築で、建築の用途や内容は異なりますが、いずれもそうした思いを汲んで設計した建築です。言わば思いと、時の継続をはかった建築と考えております。

■ 高崎郊外の蔵ギャラリー

所在地　群馬県高崎市
延床面積　78㎡
構造/規模　木造2階建
改修　2008年4月

↑ギャラリー２階部分

JR高崎線新町駅より徒歩5分、旧中山道沿いにある、商家の蔵群。

うなぎの寝床と言われる間口の狭く奥に長い敷地に、住居として使われていた棟も含めると、三つの土蔵があり、その一つを住居として、倉庫として使っていた棟をギャラリーとしてリニューアルしました。

ギャラリー棟は江戸時代に建てられていたとのことで、少なくとも築140年は経っているものです。

しばらく人の手が入っていなかった事もあり、最初の現地調査の際には状態としてギリギリという状況の中、幸いにも古い建築を活かす事に理解を示してくれた工務店と出会い、出来る限り古い建築の雰囲気を活かす形でのリニューアルを行うことができました。

古い建築は手を入れることで、こちらの想像を超えるような変身を遂げます。それは決して古めかしく作った新しいものにはまねの出来ない、時を刻む事でしか醸し出せない雰囲気というか、存在感があるからです。

↖住宅部分ビフォー
←アフター

周囲の町並みは次々と新しいものに変わっていく中、古くからの時の流れを感じられる建築となりました。

ギャラリーに入ると蔵独特の雰囲気が外界と切り離され、時を越えた心地良い空間になっています。

ギャラリーは秋のオープンに向けて現在準備中です。オープン後は地域の文化交流の場となっていることでしょう。

■ 松伏町　宝珠院客殿

～客殿の完成　もう一つの意味～

所在地　埼玉県北葛飾郡松伏町
延床面積　290㎡
構造/規模　木造2階建
竣工　2007年12月
（建物、外構完成
現在造園工事中）

松伏町は荒川、中川、古利根川に囲まれた町です。その為か都心部に繋がる高速道路や幹線道、鉄道の類いは町の中になく、これまで陸の孤島などと呼ばれてきました。今ではそれが幸いしてか、住宅地から１０分も歩くと長閑な水田地帯や緑豊かな水辺に出られるのです。

宝珠院はこうした水郷地帯に暮らす人々の為に設けられた由緒ある寺で、境内には江戸時代に繋がる史跡が幾つか残ります。私達に与えられた課題は諸施設の設計と境内全体の整備計画でした。概ね全体は５ケ年計画、１期と２期に分けての設計監理でしたが、工事が完了した今年の３月、境内で６回目の桜の花見を行いました。

↑以前の山門の場所をメモリアル広場としてりんねの輪のオブジェを作った。

↑現在造園工事中のつくばい

第１期計画は３年前に竣工した山門、参道、水屋、そして周辺の緑地修景計画でした。今回の宝珠院客殿と庭園及び駐車場は２期工事にあたります。２期工事は２００５年に設計を着手し、檀家さんや建設委員の方々と打ち合わせを重ね、設計を含めて２年という長丁場になりました。それだけ檀家の皆様の客殿への思い入れが強く、熱心であったと言うことです。参加者の皆様の多くは６０～７０代、昔この寺の境内で遊んだ話や地域の変わり行く自然や生活、風景の話、さらには参加者の親の代の話へも及びました。そして辿る結論は決まって「次世代の子供や孫へこの宝珠院の施設を、景観を残したい」ということでした。私達の“設計”という行為が、そうした人々の時と風景を繋ごうとする熱い想いに一役担うことができ、嬉しく思いました。

←客殿内観
↓建替え前の客殿に取り付いていた室生寺の杉の欄間